

英語の to 不定詞がもつ意味の多様性

—その源泉と動名詞との違いを探る—

Semantic Diversity of the *to-Infinitive* in English

— Where does it come from, and how does it differ from the gerund? —

大 高 博 美

Abstract:

Distinguishing correctly “*to*-infinitives” from “gerunds” in use is not easy at all for Japanese students learning English. Some verbs require the former (e.g. *afford to* ~, *agree to* ~, *arrange to* ~) as an object, while others the latter (e.g. *admit* ~ *ing*, *deny* ~ *ing*, *consider* ~ *ing*). In addition, there are yet two more types of verbs. One is the type in which either of them is used to change its meaning from the other (e.g. *remember* ~ *ing/to* ~, *regret* ~ *ing/to* ~, etc.), while the other type in which there is almost no difference in meaning between them (e.g. *like* ~ *ing/to* ~, *begin* ~ *ing/to* ~, etc.). In the case of the latter, indeed, there seems to be semantically little difference between them, but this does not mean that they are exactly identical in meaning. The *-ing* form (i.e. gerundive) emphasizes the function of the verb itself, while its *to*-infinitive form puts the emphasis more on the preference for, or the results of, the action (*Cambridge Dictionary* 2016). However, this explanation seems to be not effective enough for Japanese students of English to differentiate between the two forms properly in speaking and writing. This is because the difference mentioned above is not so semantically clear.

The two forms are grammatically used in three ways with or without the help of a preposition. One is as noun phrases (e.g. To see / Seeing him is necessary to ~), the second as noun modifiers (e.g. something to open a can, something for opening a can), and the third as adverbial phrases (e.g. The button is used to open / for opening the dialog ~). The difference in meaning here may also be subtle, but they surely convey some kind of difference in meaning from each other. According to *Cambridge Dictionary*, which was already referred to above, the “*for* + *-ing* form” is used to talk about the function the gerundive verb has, while the “*to*-infinitive form” to express the subject’s purpose or intention of the action from the verb. However, once again, this explanation based on the difference between “function” and “purpose” seems to be neither accurate nor effective enough for L2 English learners.

To-Infinitives preceded by Copula “be” are also an important grammatical issue for Japanese students learning English as a foreign language. This is not an easy matter for them because the form can grammatically have several meanings such as “schedule,” “obligation,” “workability,” “intention,” “fate,” depending on the context, and thus it is not easy for them to pin down the true meaning sent by the speaker/writer.

The goal of the present paper is to generalize the difference in intrinsic meaning between the *to*-infinitive and the *gerund* based on the claims made by various grammarians such as Bolinger (1968), Leech (1971), Quirk et al. (1985), Wierzbicka (1988), Langacker (1991), Declerck (1994), Duffley (2000). They argued that the *to*-infinitive form expresses something hypothetical that occurs later than the time indicated by the main verb, whereas the gerundive form something reified that occurs at the same time of the action indicated by the main verb. In other words, the former lies in “the direction to the future/goal,” while the latter in “the direction to the past.” This paper investigates why the *to*-infinitive form can spin off variously different meanings out of their basic core meaning. In other words, how are they inter-related to each other in the semantic structure in English? In conclusion, it has turned out that the various meanings derived from the core meaning of the *to*-infinitive are all logically related to each other with the result of a semantic structure.

1. はじめに

英語の *to* 不定詞は、よく知られているように、通常、前に “for” + 名詞 (句) を取り、その不定動詞のもつ動作主の存在をこの名詞 (句) 上に投射する。しかし、その名詞 (句) は統語上省略されたり (下の例1)、文主語や目的語に組み込まれたりする場合も多く (例2と3)、主語が往々にして不定である。よって、“to” + 原形動詞は「不定詞」と呼ばれる (町田 1994)。

例1. **To learn** English is necessary in modern times.

例2. I need **to see** him tomorrow.

例3. I'd like you **to see** him.

一方、文法的には助動詞に続く動詞のように “to” の付かない不定詞もあるので、本稿ではこの種の不定詞と区別するために、“to” を取る不定詞の意味で「*to* 不定詞」という文法用語を使う。

現行の多くの文法書による解説では、“be” + to 不定詞の意味は、便宜上、「義務」「必然」「可能」「予定」「運命」「意志」「非実現」などに分類されている（町田 1994, 八木 1987, Declerck 1994）。そしてどの書も、英文を読んだり聞いたりする際に “be” + to 不定詞の意味を理解するには、文脈（状況）から判断するしかないと説く。しかし、英語を学習する側に立つと（特に初級者にとっては）、これは思うほど容易なことではない。

前置きが長くなったが、本稿の狙いは、どうすれば英語教育において to 不定詞の使い方を効率的に（分かりやすく）教えることができるかを念頭に、to 不定詞のもつ意味の多様性がどこから来るかを考究することにある。この文法を授業でどのように説明すれば、学習者は動名詞と混同せずに使えるようになるだろうか。ちなみに、英語母語話者が “be” + to 不定詞の文法（意味体系）を最終的に習得できるのは、発話者によって意味ごとに異なる文法マーカーなどが使われるからなのではない。つまり、重要なことは、“be” + to 不定詞にはどの使用場面にも通底する基礎的（一般的）な意味があり、この知識があるからこそ、母語話者は各場面できが伝えたい意味を表現でき、逆に読んだり聞いたりするときは、発信者の意図する意味を正確に了解できるということである。では、この to 不定詞のもつ基礎的・核心的な意味とはどんなもので、動名詞とはどのように異なるのであろうか。本稿では、この to 不定詞のもつ本質的な意味を探ることで、例えば名詞（句）の後置修飾に際して動名詞を使う場合（例：something for opening a can）と to 不定詞を使う場合（例：something to open a can）では意味的にどのような違いが生じるのか、あるいはまた受動構文中の副詞的修飾（例えば “be used ~”）で、受動述部に “for” + 動名詞を後置した場合（例：This item can be used **for making** people happy.）と to 不定詞を後置した場合（例：This item can be used **to make** people happy.）で意味はどう異なるかなどの問いに答える。管見では、これらの問いに詳しく回答している文法書はまだ見当たらない。近年では、唯一、友繁（2020）が「like/love + to 不定詞」と「like/love + 動名詞」の違いを扱い、自分の議論を展開するための根拠を求めて、先達の諸学者による様々な

知見を簡便に紹介している。本稿での議論も、これら先達による賢察の上に成り立っているということは言うまでもない。

2. “be” + to 不定詞が表現しうる多様な意味

まず手始めに、本節ではこの構文がもつとされる基本的な意味を概観する。例えば町田（1994）では、「“be to” は一種の助動詞として働き、基本的には“be” 動詞の時制が示す時よりも後に起こることになっている事柄を表す」と解説されている（p. 438）。そして、be 動詞の取る時制（現在形か過去形）によっても表しうる意味が異なるという理由から、例文の意味は時制ごとにまとめられている。次の例文4～6は町田（1994：EX499 p. 439）からの引用である。

2.1 be 動詞が現在形るとき：「予定」「義務」「可能」「意志」

例4. We are to be married on July 10th.

私たちは7月10日に結婚することになっている（**予定**）。

例5. You are to keep your promise.

約束は守らなくてはならない（**義務**）。

例6. No stars are to be seen in the sky.

空には星が見られない（**可能**）。

特筆すべきは、このうち「可能」の意味は、上の例文にもあるように、通常、否定形で表されるという点である。また、さらに、“be to” が If 節の中で用いられると、「～するつもりならば」という「意志」の意味をもつと説明されている。次の例文7と8はEX502（p. 440）から、例文9～11はEX501（p. 439）からの引用である。

例7. If you are to write a good story, you have to read a lot.

もし立派な物語を書くつもりならば、たくさん本を読まなければならない

(意志)。

例 8. If our country is to prosper, we must work harder.

もし国を繁栄させたいと思うならば、我々はもっと働かなくてはならない
(意志)。

ちなみに、上の If 節中の be 動詞を過去時制にすると、下の例文からも分かる通り、to 補部の動作が非現実的なものであることを示すことになる。仮定用法である。

例 9. If the sun were to stop shining, we would all die.

もし太陽の輝きが止まれば、我々は皆死んでしまうだろう。(仮定・非現実)

よって、to 不定詞は派生的に「非現実性」の意味も表しうることが分かる。この点については、3 節で再び言及する。

2.2 be 動詞が過去時制のとき：「予定」「運命」「可能」「非実現」

to 不定詞に先行する be 動詞が過去時制下にあるとき、to 補部は「予定」「運命」「可能」「非実現」等の意味を表しうる (町田 1994)。ただ、「予定」の意味は時制の違いに影響を受けない。これは、八木 (1987) も指摘するとおり、to 不定詞の核心部を成す意味だからであろう。

例 10. The meeting was to take place in New York.

その会合はニューヨークで開かれることになっていた (予定)。

例 11. He was never to see his friend again.

彼は二度と友人には会わない運命だった (運命)。

例 12. The suspect wasn't to be found anywhere.

その容疑者はどこにも見つからなかった (可能)。

ここで注目すべきは、「運命」に当たる意味は、上の例文にもあるように、通常、過去時制で表されるということである (なぜそうなのかについては次節で扱う)。

また、過去時制下で to 補部に完了体動詞が置かれると、「～する予定だったが、そうしなかった」という「非実現」の意味が表される。

例 13. The treaty was **to have** been signed on the day. (EX501 p. 439)

その条約はその日に調印される予定だったが、そうされなかった（**非実現**）。

以上、“be” + to 不定詞の表しうる様々な意味を、理由には触れないまま、例文を通して概観してみたが、この構文が表現しうる意味の多様性には改めて驚かされる。しかし一方、これらの意味には共通する点があるということも看過できない。例えば、“Students are **to come** back to the dormitory by 9 pm.” は「義務」と「予定」のどちらで捉えても、意味がそれほど大きく異なるというわけではない。状況次第なのである。例えば、この文が寮の貼り紙に書いてあるとしたら、通常、「義務」として解されるであろう。この意味で訳されると、日本語として最も適当に聞こえるからである。

例 14. Students are **to come** back to the dormitory by 9 pm.

訳 1：学生は寮に9時までに戻らなくてはならない（**義務**）。

訳 2：学生は寮に9時までに戻ることになっている（**予定**）。

一方、次のように、「可能」もしくは動作主の「意志」を盛り込んで訳すことは適当でない。

訳 3：* 学生が寮に9時までに戻ることは可能だ / 起こりうる（*可能）。

訳 4：* 学生は寮に9時までに戻るつもりである（*意志）。

まず上の訳 3 が不適切である理由は、文が否定形を取っていないからであるが、なぜ「可能」の意味が否定形で生じるのかについては次節で述べる。次に訳 4 が不適切である理由は、“be” + to 不定詞が示す「予定」は動作主の個人的な意向によって遂行される「予定」ではなく、公的に決まっている必然性を伴う「予定」を含意

するものだからである (町田 1994 p. 439)。「公的に決まっている必然性」とは、主語が自分のコントロール能力の外にある何らかの力 (命令や決まり) の下に置かれていることを意味する。よって、上の例 14 の文は「学生は夜 9 時までに寮に戻れ」のような、「強制」もしくは「命令」の意に取れなくもないのである。

一方、上の例文 7 と 8 に見られるように to 不定詞が If 節の中で使われると、「意志」(volition) を表現する日本語訳も不可能ではなくなる。なぜなら、ここでの条件法「If A : B」は、「もし動作 A が起こりうるとしたら、B が前提となる」という論理構造¹⁾に基づいており、前半部の「もし動作 A が起こりうるとしたら」は「もし動作 A を起こす意志が動作主にあるのなら」の意にも敷衍されうるからである。繰り返すが、ここでの「意志」は、例 8 から分かるように、必ずしも文主語がもつというわけではない。よって、「意志」の代わりに「義務」や「予定」で解しても間違いとはならないであろう。

ここで改めて問うが、“be” + to 不定詞という文法形は、単純な構造から成るにも拘わらず、なぜかくも多様な意味を担いうるのだろうか。次節からの議論・考察を通して考えたいのは、この点である。

3. to 不定詞のもつ未来志向性

to 不定詞のもつ意味に関しては、これまで多くの文法家が関心をもち、動名詞との比較で持論を述べている。まず Bolinger (1977) は、その意味的特徴として「仮定的 (hypothetical) な内容」が挙げられると主張した。続いて、Dixon (1984) は「未完了の活動 (yet unrealized activities)」、Quirk et al. (1985) は「潜在的・未来的状況 (a potential future situation)」、Langacker (1991) は「未来の出来事 (future events)」、そして Duffley (2000) は「これから起こる潜在性 (subsequent potentiality)」を指摘した。さらにまた、Wierzbicka (1988) は、to 不定詞は「欲

1) 「If A : B」は、他に「もし A なら B を導くことになる」という論理構造も持ちうるが、ここでの表現には該当しない。

求 (wanting)」を含意するとも述べている。実際、この範疇に属する動詞の例として、“**expect to, aim to, hope to, want to, wish to, intend to**”などが挙げられる。

上述したこれらの意味は、どれも“be”+to不定詞を文法的に解釈する上で助けとなる核概念である。なぜなら、to不定詞の一部である“to”は、品詞上「前置詞」ではないが、出自は同じであるので(OED 1998) to不定詞も基本的に前置詞“to”と同じ意味(機能)をもっていると考えるのは自然であり(Curme 1931, Huddleston & Pullum 2002, Smith & Escobedo 2002, 友繁 2020)、意味上どれも「方向性」や「着点の存在」に関連していそうだからである。尚、安藤(1984)では、動名詞を「叙述的」(factive)、不定詞を「前望的」(prospective)としているが、着眼しているところは同じであろう。よって、to不定詞は、当該動詞の動作・遂行が今後起こりうる(あるいは、動作は完了に向けて進行中である)ことを表すことにより、まず「予定」の意味が基本となるのである。

ある動作が着点に向かって進行中ということは、必ずこの動作はいずれ完了することを含意し、ここから「当然」の意が派生する。そして、この概念はさらに「義務」の意識へとつながる。起こって当然の動作は、義務的な動作と表裏一体の関係にあるからである。例えば、能力から判断して「彼がいずれ我社の社長になるのは当たり前だ(当然)」という文は、意味的に「彼はいずれ我社の社長になるべきだ(義務)」²⁾とかなり近いことが理解できよう。前者の意味が敷衍されたものが後者と言える。

ある動詞がto不定詞の形を取ることで「予定」の意味をもちうることは、すでに上で述べた。では、「可能」の意味はそこからどのように派生するのだろうか。実は、この概念も、先の「義務」「当然」と同様に、動作が着点に向かって進行中という考えから派生したものと考えられるのである。動作の完了はいずれ必至と思われているわけであるから、その動作が起こりうるのは「当然」と同時に「可能」でもあると敷衍されうるわけである。つまり、「当然」と「可能」は、意味的

2) あるいはまた、「彼にはいずれ我社の社長になって欲しい(願望)」の意にも敷衍されうる。

に表裏一体の関係にあると言える。先の例文 6 と 12 から分かりますとおり、これらの文から「可能」の意味解釈ができるのは、動作の完了を「可能」にする能力が文主語にあるからなのではなく、「他者からの力が働いているので、その動作は完了しうる」という意味の「可能」性が読み取れるからである。ただし、意味解釈において明らかに「可能」に分類するのが適切であると思われるのは、to 不定詞が否定形で使われるときである。なぜなら、着点への到達が予定（当然視）される動作が否定されることは、換言すると、「不可能」であるということと同義であるからである（「～しない予定だ」≡「不可能だ」）。to 不定詞で表現しうる「可能」性が常に否定と共起する形で起こる理由がここにある。つまり、to 不定詞の基底の（無標の）意味は「予定」であるため、肯定下での解釈では、この意味が派生的意味の「可能」より優先されて適用されるということである。

次の例文も「可能」の意味で訳しうるが、理由は上述の理由に基づく。ただし、否定辞が付いているので実際には「不可能」の意となる。尚、「可能」の意は、先に挙げた例文 6, 11, 15 から分かりますとおり、時制に左右されることはない。

例 15. I was sorry not to meet him.

私は、彼に（当然会えると思っていたのに）会えなくて残念だった。（**不可能**）

一方、“for” + 動名詞ではこのような「不可能」を示す表現ができない（*I was sorry **for not meeting** her.）。

次は、to 不定詞の副詞的用法が「目的」（～するために）以外にもつもう一つの意味「結果」の用法についてである。例として次のような文が挙げられる。

例 16. I awoke **to find** myself in a hospital.

私は、気が付くと病院にいた。（**結果**）

この解釈が可能になるのは、「目的」と「結果」は、次の例文からも分かる通り、論理上、表裏一体の関係にあるからである。下の二通りの訳は、表現としては違っ

ていても、意味的には大差ないことが分かる。

例 17. We can use light **to turn** night into day.

訳 1 : 我々は、夜を昼に変える目的で灯りを使う。(目的)

訳 2 : 我々は灯りを使い、その結果、夜を昼に変える。(結果)

よって、逆を言えば、先の例 16 は回想的に、「(後から思えば、その時) 私は入院している自分に気づくために目を覚ましたようなものだった」と、「目的」の意味をもたせて解釈することもできるということである。

さらに言えば、過去時制下の to 不定詞の副詞用法は、単なる「結果」というよりも、次の例文に見られるように、「運命」味を帯びた「結果」を示すこともできる。

例 18. She went to Germany, never **to come** back.

彼女はドイツへ渡り、その後二度と戻ることはなかった。(運命)

着点に向けて進行中の動作が過去時制下で表現されると、話者の発話時の視点からすれば、論理上、関連する動作はすでに完了していることになる。よって、肯定下で表されるとき、その動作は完了していることが含意され、逆に否定形で表されるときは未完に終わっていることが含意されるわけである。つまり、これはすでに結果の知れている「予定」を過去の視点から語った表現であるので、発話時点から見ると、「結果的には～することになるのであった」という「運命」的な意を帯びた解釈が可能になるというわけである。

例 13 の “The treaty was **to have** been signed on the day.” では「非実現」の動作 (be signed) が表されていることはすでに言及したが、この解釈は、“be to” を一種の助動詞とみなして「was/were + to + 完了不定詞」全体が一種の仮定法として機能するから可能となるのである。ここでは、想像上の (非現実の) 過去 (つまり「その日に条約の調印は履行されるはずだった」という反実仮想) が表されている (C.f. The treaty **should have been signed** on the day)。一種の「運命」

的表現として捉えることもできよう³⁾。

本節の最後に、to 不定詞の副詞的用法に関してもう一つ取り上げたい派生的意味がある。それは、「～なので」「～するとは」と和訳しうる「原因」や「理由」を表す用法についてである。これは、論理上、「未来志向」の意味「予定・目的」とどのように関わるのであろうか。

例 19. I was surprised to notice that I had no money left in my wallet.

私は、財布にお金が残ってないのに気付いて驚いた。(理由・原因)

例 20. I'm glad/happy to see you.

あなたにお会いできて嬉しい。(理由・原因)

例 21. He must be crazy to do such a thing.

そんなことをするなんて彼はどうかしている。(理由・原因←非現実)

上の例文からも分かる通り、この構文は感情を表す形容詞と共に使われ、時制上の違いは意味解釈に影響しない。では、なぜこれらの構文では to 不定詞が未来ではなく現在の事実を表しうるのだろうか。つまり、なぜここで to 不定詞は、それが本来もつ核心的意味の「未来志向性」から逸脱できるのだろうか。ただ、例 19 のように過去時制下にある場合は、上で述べた「結果」が「理由・原因」に敷衍されたと考えることで納得できる。つまり、「驚いたことに、あの時、結果的には財布に金が残っていなかったのだ」のようにも解釈できるということである。問題は、繰り返すが、例 20-21 のような現在時制下で使われている to 不定詞である。どのような論理で核心的意味の「未来志向性」が「理由・原因」に取って代わられるのだろうか。理由としては、これらの構文がそのような解釈になるようイディオム化

3) ちなみに“to”+完了不定詞は、“claim, expect, hate, hope, like, love, prefer, pretend”などの動詞と一緒に使われた時にも同様に機能する。

He pretended to have lost her number and so had been unable to contact her.

彼は、彼女に電話できなかったことの釈明に彼女の電話番号を失くしてしまったふりをした。

She claims to have met a number of famous people, but I don't believe her.

彼女は、多くの有名人に会ったことがあると言っているが、私は信じない。

(特殊化) されているということがまず挙げられるが、実は意味的にも「未来志向性」が完全に消え去っているわけではないという点も重要である。例えば、“I’m glad/happy **to see** you.” という挨拶の固定表現において、to 補部は確かに発話時点（現在）で相手（you）との出会いがすでに実現していることを示しはするが、to 不定詞が使われることによって、「結果、これからも会うことになるので楽しみにしている」という未来志向の意味も込められているのも事実である。例 21 も同様にイディオム化した構文の例だと言える。それが証拠に、次のような別の感情表現構文では動名詞も使用可能となる。

例 22. He must be out of his mind **to say** (saying) such a thing.

そんなことを言うなんて彼はどうかしている。

つまり、イディオム化した構文では、to 不定詞は現在時制下でも「結果」を表現でき、これが「理由・原因」に敷衍されるときもありうるということである。例 21 で、to 補部 (to say such a thing) は、実際に主語 (he) が愚かな発言をした事実を示すが、to 不定詞が使われることで、そのような愚かな発言がこれからも繰り返される可能性が暗示されているのである。つまり、この文は修辭的表現で、to 補部の動作を現実的には起こりえないものと見なした上で（「非現実性」の to 不定詞）、これが逆にもし起こりうるようなら、主語に該当する者の精神は正常と呼べなくなるという論理に基づいているのである。

一方、主語が人（人称代名詞）ではなく形式主語 (it) である次のような固定構文（例 23）では、動名詞と to 不定詞がもつ基本的な意味上の違いは維持される。

例 23-a. (It is) nice **to meet** you.

お会いできて嬉しいです。（出会いの最初に使用：「未来志向」）

-b. (It was) nice **meeting** you.

お会いできて嬉しかったです。（別れ際に使用：「過去志向」）

ちなみに、下の例文（24-a, b）からも分かるように、to 不定詞の形（原形不定詞

か完了不定詞か) によっても意味は異なり、前者の場合はあくまで「未来志向」の意味を維持する点が興味深い。

例 24-a. I'm sorry **to keep** you waiting. (相手を待たせることになる前に言う謝罪表現)

-b. I'm sorry **to have kept** you waiting. (相手を待たせてしまった後に言う謝罪表現)

よって、これまでに述べてきた to 不定詞の核心的意味が「未来志向性」にあるということは、基本的に正しいと主張できそうである。尚、動名詞に付いての議論は次節で扱う。

4. 動名詞と不定詞

英語の他動詞は、目的語の形態により 1) 動名詞を取るもの、2) to 不定詞を取るもの、3) 両方取るが意味が変わるもの、そして 4) 両方取るがさほど意味が変わらぬもの、の四種に分類できる。尚、二番目の範疇で使われる to 不定詞は、機能的には「名詞用法」のものである。本節では、前節で考察した to 不定詞のもつ意味上の基本概念がここでの動詞分類にどのように関わっているかについて考察する。

4.1 動名詞を取る動詞

動名詞を目的語に従える動詞には、次のようなものが挙げられる。

admit, anticipate, avoid, (can't) help, (can't) stand, consider, deny, dislike, enjoy, escape, fancy/imagine⁴⁾, feel like, finish, give up, imagine,

4) “fancy” と “imagine” の動詞に関しては、動名詞の後に主語の役割を持たせた再起代名詞を必要とする。例：She fancied **herself** passing the exam. / He imagined **himself** riding on the space craft.

insist on, involve, keep (on), mind, miss, postpone, practice, put off, risk, stop, succeed in, suggest, think of, etc.

例 25. He admits **having** stolen my ring.

例 26. I enjoyed **talking** with you.

例 27. I denied ever **having** met her.

例 28. Do you mind **turning** on the light? (turn の動作主は文主語 you と同じ)

C.f. Do you mind my **turning** on the light? (turn の動作主は「私 (my)」)

Do you mind me **turning** on the light? (上と同じだが、より口語的)

4.2 to 不定詞を目的語に取る動詞

一方、to 不定詞を目的語に従える動詞には、次のようなものがある。

afford, agree, arrange, ask, choose, continue, decide, demand, deserve, fail, forget, help, hope, intend, learn, manage, mean, need, offer, plan, pretend, promise, refuse, threaten, want, etc.

例 29. I can afford **to buy** the expensive car.

例 30. He demanded **to be** satisfied.

例 31. She pretends **to take** a nap(=to be sleeping).

4.3 動名詞と to 不定詞の両方を目的語に取るが、意味は異なる動詞

意味によって目的語に動名詞を取るか to 不定詞を取るかを区別する動詞には、次のようなものが挙げられる。量的には、先の二種と比べ、多くない。

remember, forget, regret, stop, try, go on

例 32-a. I remember **seeing** him somewhere.

彼にどこかで会ったことを覚えている。

32-b. Please remember **to buy** some eggs for me.

卵を買うのを覚えといてね。

例 33-a. I regret **saying** such a thing to her. (= I **regret having said** such a thing to her.)

彼女にあんなこと言ったのを悔やむ。

33-b. I regret **to say** that I have to quit this job.

残念だが、自分の離職を告げなくてはならない。

例 34-a. He went on **talking** about me.

彼は私について話し続けた。

34-b. He went on **to talk** about me.

彼はさらに（続けて）私について話し出した。

4.4 意味を変えずに動名詞と to 不定詞の両方を目的語に取る動詞⁵⁾

最後に、動名詞と to 不定詞のどちらを目的語に取っても意味をほとんど変えない動詞もあり、次のようなものが挙げられる。ただ、まったく意味が同じというわけでもないので、注意を要する。この点については、後ほど再度言及する。

begin, start, cease, continue, hate, like, love, prefer, bother

例 35-a. She likes **cooking** Japanese dishes.

彼女は日本料理を作るのが好きだ。

35-b. She likes **to cook** Japanese dishes.

彼女は（好みとして / 習慣的に）日本料理を作るのが好きだ。

本節で是非考えたいのは、動名詞を取る動詞と不定詞を取る動詞には意味的にどんな特徴があるだろうかということである。これが分かれば、英語動詞の習得に大いに役立つはずである。そのために、まず、上で三番目の範疇に分類されている動

5) ただし形態素の // -ing // は 2 つの動詞に連続して使うことができないので、進行形の文中にあっては 2 つ目の動詞は to 不定詞になる。例：It is starting to rain / *It is starting raining.

詞の使われ方から考察してみる。なぜなら、「動名詞と不定詞の両方を取るが意味は異なる」とされる一連の動詞(句)“remember, forget, regret, stop, try, go on, etc.”を分析してそこに見られる違いに着目すれば、動名詞と to 不定詞がもつ基本的な意味の特徴を把握できる可能性があるからである。

まず容易に気づきうるのは、ここでの to 不定詞が、先に言及した to 不定詞の基本的な意味特徴である「方向性・着点の存在」(未来志向性)を維持しているという点である。つまり、to 不定詞を目的語に取る動詞とは、本質的にこの未来志向性と合致する動詞のことであると言える。これに対して、動名詞のもつ意味的特徴は「過去志向」「事実志向」(Leech 1971, Kiparsky & Kiparsky 1971)と呼べよう。また、Wierzbicka (1988)・Langacker (1991)・Verspoor (1996)・Smith & Escobedo (2001) などによれば、動名詞で表される動作は主文動詞が表す動作と時間的に重なると言う。よって、動名詞を取る動詞とは、to 不定詞の取る「未来志向性」をもたないという意味で、本質的には「過去志向性」と合致・共起する動詞と呼べよう。

この範疇に分類される動詞は、どちらの志向性も取りうるが、どちらを取るかで意味が異なるのである。例えば“remember”を例に挙げると、“remember ~ing”では「~したことを覚えている」(過去志向)の意となるが、“remember to ~”では「これから~すべきことを覚えておく / 忘れずに~する」(未来志向)の意となる。後者の“to”に後続する動詞の意味上の時制は“remember”の時制(発話時)よりも後(未来)に起こることが含意されるのである。同じく“forget ~ing”では「~したことを忘れる」の意だが、“forget to ~”では「~すべきことを忘れる」の意となる。また、“regret to ~”は「これから起こる(起こす)であろう動作を残念に思う」、つまり「残念ながら~する」の意味だし、“try to ~”は「~しようとする」である。ちなみに後者が過去時制で使われると、「~しようとはしたが結果的には成就しなかった」ことが含意される。

では次に、to 不定詞しか取らない第二範疇動詞の特徴は何だろうか。一つ言えることは、このグループの動詞は、動名詞しか取らない第一範疇動詞とは違って、

いつも意味的にこれから先に起こる動作を目的語に選ぶという点である。例えば“agree”が常に to 不定詞を目的語に取るのは、「同意する」という行為には意味的に「方向性と着点」の存在が内包されているからである。同様に、“**want to, afford to, arrange to, refuse to**”なども、すべて同じ未来志向の発想に基づく表現だと言えよう。さらに、「方向性・着点の存在」は往々にして「欲求」と結びつくという点も、to 不定詞の本質を見る上で見逃せない (Wierzbicka 1988)。

一方、動名詞しか取らない第一範疇動詞は、これから先に起こる未来の動作を目的語にすることはできないので、to 不定詞を決して取ることがないのである。とは言っても、この範疇に属する“avoid”、“mind”、“anticipate”などの動詞からこのことを実感するのは難しいかもしれない。それというのも、例えば、“**Avoid getting** your feet wet.”での“avoid”、例文 28 “Do you **mind turning** on the light?”での“mind”、そして“**I anticipate seeing** her brother.”での“anticipate”などは、どれもこれから起こる動作を目的語に取っているようにしか思われなからである。では、なぜこれらの動詞が目的語に動名詞を取るのかと言えば、まず“avoid”は起こって欲しくない動作を目的語に取る動詞だからであろう。つまり、起こって欲しくない動作は、あくまで仮想上のものあって、「方向性と着点」の認識を主語の意識上に起こさないからである。次の動詞“mind”にも同様のことが言える。この動詞は、動名詞を目的語に取るときには、「否定・疑問・条件」の文で使われるが、やはり起こって欲しくない動作を想定して目的語に取るのである。また、動詞“anticipate”に関しても、同様の分析が可能である。この動詞は、確かに“expect”と同様に未来の出来事を目的語に取るが、意識の方向が“expect”とは逆である。つまり、“anticipate”は「未来に起こりうることを予め（前もって）予期して今から対処する」の意をもつ動詞で、話者の意識は未来から現在に向かっているのである。換言すると、認識上でその動作はすでに完了したものと見なされているがゆえに「方向性と着点」の認識が主語の上に起こらないのである。

このように、ある動詞が実際に「方向性と着点」の視点を帯びるかどうかは、目的語によって示される動作の起こる時点だけでなく、その動作の生起が望まれてい

るか否かの心的態度にも依存すると言えよう。生起が望まれない動作は、たとえ未来を想定したものであっても、文法的（現実的）には決して「方向性・着点」の意をもてないということである。尚、動名詞の意味上の主語は、例文 32-a ~ 34-a から分かる通り、所有代名詞や代名詞で明示されない限り、先行する主文動詞の主語と一致するが、後述の通り、基本的には動作主を限定しない。理由は、品詞的にあくまで名詞で、D 構造上⁶⁾で「主語」をもたないからである。

最後に、四番目の範疇動詞についてである。これらは、動名詞を取っても不定詞を取っても、さほど意味的に違いをもたらさないとされる動詞である。しかし、繰り返すが、to 不定詞が上述の基本的な「方向性と着点の存在」の意味をもつ以上、やはり、両者にはニュアンス上で微妙な違いが生じることになる。例えば“like ~ ing”と“like to ~”の間にある潜在的な意味上の違いを比べてみると、後者は to 不定詞を取っているので動作主の存在が含意されており（主文主語）、単に「～するのが好き」という意味だけでなく、「好きなので、これからも機会があれば当然～したい」という未来に向けた「連続性」「欲求・願望」なども含まれることになる。この「欲求・願望」の意味は、動詞“like”が本来もつ意味の一部でもある。よって、次のような仮定法を含む例文では「欲求・願望」の意味が全面に出てきて、結果、to 不定詞の使用は文法的だが（36-a）、動名詞の使用は非文法的となる（36-b）。

例 36-a. I'd **like to have** this dish on the menu.

メニューにあるこの料理をぜひ注文したい。

36-b. *I'd **like having** this dish on the menu.

さらに、例えば「現在、ブリスベンに住んでいる」という特定の状況下では、同様の論理で、“*I like to live in Brisbane.”よりも“I like living in Brisbane.”と言う方が適当ということになる。

すでに言及していることではあるが、to 不定詞と差別化する上で重要なポイント

6) D 構造とは、統語論における表層構造（Surface Structure）に対するもう一つの構造で深層構造（Deep Structure）のことである。

トとなるので、本節の最後に再び強調しておきたいことがある。それは、動名詞では動作主が限定されないという点である。例えば動詞“advise”と“allow”は、下の例文からも分かる通り、共に動名詞と to 不定詞の両方を取りうるが、意味的には少々異なる。つまり、動名詞では動作主の特定がなされていないのに対し、to 不定詞ではその限りではなく、意味上の主語が先行動詞の目的語になって存在しているのである。

例 37-a. I wouldn't advise **staying** in that hotel.

私ならそのホテルに泊まることはお勧めしません。(動詞 stay の動作主は不定)

37-b. I wouldn't advise you **to stay** in that hotel. (動詞 stay の動作主は目的語 you)

私ならあなたにそのホテルに泊まるようお勧めはいたしません。

例 38-a. They don't allow **parking** in front of the supermarket.

あのスーパーマーケットの前には駐車できません。

38-b. They don't allow people **to park** in front of the supermarket.

あのスーパーマーケットの前に駐車するのはよした方がいい。

5. 動名詞と to 不定詞による名詞修飾

5.1. 名詞修飾の“for”+動名詞と to 不定詞

名詞（句）の後置修飾に“for”+動名詞を取るか to 不定詞を取るかというのも、学習者にとってはやっかいな問題である。日本語では共に「～するための」と訳すことができ、意味的に差が不明瞭であるからである。文法書では、通常、“for”+動名詞は「機能・用途」を、そして形容詞用法の to 不定詞は「目的」や「意向」を表すとされる (Cambridge Advanced learner's Dictionary 2016)。

例 39. This is **something for opening** a can.

これは缶を開けるための物だ。(機能・用途)

例 40. A knife is a common **tool for cutting** meat and vegetables into pieces.

例 41. I'm not **one for keeping** a diary.

私は日記を書くような人間ではない。(機能・用途)

例 42. I want **something to open** this can.

この缶を開ける物が欲しい／手に入ったら開けたい。(目的・意向)

例 43. There are **sandwiches to eat** for lunch in the fridge.

冷蔵庫に昼食用サンドイッチが入っている。(目的・意向)

例 44. He is the only **man to do** this job.

彼はこの仕事ができる唯一の男だ。(目的・意向)

両者をどのように理解すれば、うまく使い分けられるようになるだろうか。結論を先に言えば、ここでも同様に、動名詞と to 不定詞が基本的にもつ意味上の違いが看取できる。“A tool **for opening** a can” での “for” + 動名詞が「機能」「用途」を表すのは、動名詞が動作主を限定せず、本質的に「未来志向性」をもたない、つまり動詞の動作そのものに焦点を当てるからである。よって “a tool **for opening** a can” というときの “for opening” は「(過去の経験が教えてくれる通り) 開缶に使える」という用途としての意味をもち、特定の動作主は含意されていないのである。一方、“a tool **to open** a can” というときの “to open” は、表層では見えないものの、動作主の存在を暗示し(文主語と同じ)、「自分は開缶したいので、あったらこれからぜひ使いたい」の意(「目的」となる。同様に、次の二文にある名詞節 “the motive for ~” と “the motive to ~” にも意味上で違いが認められる。

例 45. What was his motive **for committing** murder?

彼の殺人動機は何だったんだ？

例 46. She hadn't thought about his feelings or motive **to help** others.

彼女は(その時)、彼の他人を援助したいという願望や動機に思い至らなかった。

例 45 で示される「動機」は、彼がすでに犯している殺人行為についての動機であるのに対し（過去志向性）、例 46 のそれは、時制は過去であるものの、その時点でその後起こりうると想定される行為（彼による他人への援助）を誘引する動機である（未来志向性）。

上述の違いに加え、基本的に「動名詞では動作主が限定されない」ということを踏まえておくと、名詞節を作る際に修飾部を“for”+動名詞と to 不定詞のどちらにするかでさほど悩まなくてもよくなる。そしてこのことは、文の読解という認知の観点からも同様である。例えば、次の例文 47-a において、“for ending contracts” は、文法的に述部の“will maintain cancellation fees” に掛かる副詞か、あるいは先行する名詞句“cancellation fees”の限定詞（後置形容詞句）かのどちらかだが、実際には後者であることがすぐに理解できる。理由は、まずそれが名詞に先行されていることと、もし仮に動詞“end”の動作主が主文主語の“his company”であるなら to 不定詞の“to end contracts”となっているはずだが、そうはなっていないからである。次文 47-b の“method”を底とする後置修飾“**for using a folding fan**”においても同じことが言える。つまり、ここでの扇子使用者には特定の人物の存在が含意されていないのである。

例 47-a. He added his company will maintain cancellation fees **for ending** contracts before maturity. (The Mainichi Daily : 2018 年 8 月 3 日)
彼は、「当会社は満期日前の契約終了のためのキャンセル料を維持するつもりだ」と付言した。

47-b. The method **for using** a folding fan
扇子使用の方法

例 48-a. The bombardier pushed the button **to drop** the atomic bomb on Hiroshima. (The Mainichi Daily : 2018 年 8 月 4 日)

48-b. A method to **pay back** a loan
ローンの（今後の債務者による）返済方法

一方、例文 48-a では to 不定詞 (to drop) が使われているが、意味的に「未来志向性」の表現が選ばれているのは納得できる。では、ここでは形容詞用法あるいは副詞用法のどちらで使われているであろうか。文法的にはどちらの解釈も可能であるが、動詞 “drop” の動作主は一般主語ではなく文主語 “the bombardier” (爆撃手) と取ることが自然なので、ここでの to 不定詞は副詞的用法と捉えられる可能性が高い。48-b においても “method” の後置修飾に to 不定詞が使われているが (形容詞用法)、これは、動詞 “pay” の動作主が推定でき (当該ローンの債務者)、その動作 (返済) は未来志向性を帯びているからである。

ついでながら、“for” + 動名詞と to 不定詞以外に名詞修飾をするものとして「現在分詞」があるが、こちらは「進行中」の意味を持つので、意味に依る差別化が容易である。

例 49. He is the only man (who is) **doing** this work now.

彼は、目下、この仕事に従事している唯一の人だ。

5.2. 形容詞用法の to 不定詞と “to be” + 過去分詞

ここでは、名詞を後置修飾する to 不定詞と “to be” + 過去分詞の意味上の違いについて考察する。本稿での主な研究対象である動名詞と to 不定詞の用法比較からはやや離れることになるが、英語教育上、上の区別は to 不定詞の形容詞用法に関わる重要な文法項目の一つである。

名詞の後置修飾において能動態 to 不定詞を使うべきか、それとも受動態 to 不定詞を使うべきかは、学習者にとって悩ましい問題である。特に、下の例文からも分かるように、There- 構文に組み入れる名詞修飾の際は特にそうである。例 51 は町田 (1994: EX326 p.313) からの引用である。

例 50-a. There is nothing **to do**.

50-b. There is nothing **to be done**.

例 51-a. There are many places **to visit**.

51-b. There are many places **to be visited**.

町田（1994）では、「能動態を用いても受動態を用いても意味が同じになるならば、簡単な能動態を用いる方が普通である」と解説している（p. 313）。両者に意味的な違いはないというスタンスである。一方、八木（1987）では、両者は意味的にまったく同じというわけではなく、能動態では「予定・義務・運命・必然」が表され、受動態では「予定・可能」が表されるとしている。どちらにも「予定」の意味が共有されているのは、彼によれば、「予定」の概念は to 不定詞が本来持っているものだからである。次の二つの例文は、八木（1987）でも引用されている Curme（1931）からのものである。

例 52-a. This is the man **to send**.

この人が行かせるべき人だ。（**義務**）

52-b. This is the man **to be sent**.

この人が行かせる予定になっている人だ。（**予定・可能**）

上の例文 50～52 は、いずれも有意志の主語をもたない場合の例であるが、そうではない場合はどうであろうか。下の例は Quirk et al.（1985: 1268）からのものである。

例 53. I've got letters **to write** tonight.

例 54. [?]I've got letters **to be written** tonight.

例 55. We have a plenty **to eat**.

例 56. [?]We have a plenty **to be eaten**.

上の例文 54 と 56 は文法性の低い文と判断されるが、理由は、八木（1987）にもある通り、“to” + 受動態補部（to be written/to be eaten）の主語（letters/a plenty）と文主語（I/We）が同じでないからである。一方、次のような例文は、同じ状況にあっても文法的と判断される。“to” + 受動態補部の意味上の主語が後続の前置詞句 “by her children” によって明確となっているからである。

例 57. She has made too much **to be eaten** by her children.

一方、『Cambridge 英語辞典』(2016)では、名詞修飾のための to 不定詞と “to be” + 過去分詞の意味的違いは、話者による焦点 (Focus) の当て方に依るとしている。つまり、焦点が、前者では動詞の動作主 (Agent) に、そして後者では被動作主 (Receiver) に当てられているというわけである。

例 58. The doctor gave me an eye-patch **to wear**.

眼帯を着けるのは私 = agent (義務)

例 59. Andy is hoping **to be chosen** for the rugby team.

選ばれるのは Andy=receiver (可能)

この知見に基づくと、なぜ to 補部が意味的に「義務」と判断され、“to be” + 過去分詞が「可能」と判断されるのかが分かるようになる。ある動詞の動作主 (意味上の主語) が文中で示され、それがその動作の Agent か Receiver かで、to 不定詞と “to be” + 過去分詞のどちらを選ぶべきかが決まるというわけである。動作の意志決定権は Agent の方にだけあるので、前者は自ずと「義務」の意味に解釈され、逆に Receiver は動作遂行を左右する意志をもたないので、後者は「義務」ではなく「可能」として解釈されるのである。具体的に言えば、例 58 の文では動詞 “wear” の動作主として “me” が先に置かれ、Agent の存在を示す役割を担っている。一方、例 59 の文では、動詞 “choose” に対する “Andy” のもつ役割は Receiver である。ゆえに、前者では to 不定詞が、そして後者では “to be” + 過去分詞が使われるというわけである。

6. 動名詞と不定詞による述部修飾

“for” + 動名詞と to 不定詞には、下に挙げる例に見られるとおり、副詞的修飾の機能もある。“be” + 形容詞に後続する場合は、通常、固定化している前置詞が要求されるので自ずと動名詞が選ばれることになり、動名詞か to 不定詞かで迷うことはない。例えば次の文 (例 60) では、“be + famous” が前置詞 “for” によっ

て後続されることを要求するために、自ずとその次には動名詞が続くこととなる。

例 60. She is famous **for being** a good pianist.

しかし、下の例文に見られるように、どちらが適当かで迷う場合もある。例えば、次のような場合である。

例 61-a. Sue is afraid **of touching** the snake.

スーはその蛇に触ってしまうのが怖い。(理由)

61-b. Sue is afraid **to touch** the snake.

スーは怖くてその蛇に触れられない。(目的)

例 62-a. He thanked me **for lending** him some money.

彼にいくらかお金を貸してあげたので、彼は私に感謝した。(理由)

62-b. Thank you **for leaving** me alone.

私を一人にしておいてくれて有難う。(理由)

62-c. I'll thank you **to leave** me alone for a moment.

しばらく一人にしておいて下さい。(目的)

ここでは、“of/for”＋動名詞と to 不定詞のどちらを選択すべきかが問題となっているわけだが、判断の鍵となるのは、動詞の動作主が文中に明示されているかいないかではない。有効なのは、先にも述べた to 不定詞は基本的に「未来志向」の補部に使われるという点である (61b, 62c)。

では、“for”＋動名詞と to 不定詞が受動構文 “be used ~” を含む文中で副詞節として使われる場合はどうであろうか。この場合、“for”＋動名詞と to 不定詞の使い分けがさらに困難になる。実際はどちらの表現も文法的で、意味的のどのような違いがあるのか判然としないからである。つまり、“be used” に後続する for 補部と to 補部は共に「目的・用途」の意味を持ちうるために、両者を意味に依存して使い分けることができなのである⁷⁾。しかし、両者には何らかの違いが必ずあるは

7) 尚、“used to”＋動詞は、「かつて～したものだ」の意（過去にあった習慣など）にもなるが（例：

ずである。以下ではこの潜在的差異に焦点を当てる。

次の例文 63-64 は、いずれもインターネット上で英語母語話者によって使われていたものからの引用である。

例 63-a. A camel can be used **for riding**.

63-b. Ultraviolet light may be used **for disinfecting** towels.

63-c. Originally, salt was used **for flavoring** instead of sugar.

元々は砂糖ではなく塩が味付けに使われた。

63-d. The code checks which Request Server method was used **for transferring** the data and creates an array named wish.

コードは、データの転送にどのサーバー要求メソッドが使用されたかを
確認し、wish という名前の配列を作成します。

63-e. Germitol is used **for disinfecting** medical equipment and the hands of medical staff.

63-f. The anesthetic is used **for letting** a patient sleep.

例 64-a. The information you provide will be used **to improve** the page.

いただいた情報は、今後のページ改善のために使用されます。

64-b. Values between 0 and the number of bookmarks of the same level will be used **to insert** the bookmark at that specific location within the parent.

0 から、同じ階層のしおりの数までの値を使って、しおりを「親」の中
のその位置に挿入します。

64-c. These medicines have been used **to treat** anxiety and **to prevent** epileptic seizures.

I used to take a walk early in the morning when I was young.)、構文的には異なる。つまり、ここでの “used to” は一種の助動詞として振る舞い、文頭の主語が後出の to 不定詞の動作主である。これは、“be used to” + 動名詞 (〜に慣れている) の構文についても言える (例: He is used to **using** the machine.)。

上の例文を観察してまず気付くことは、「目的・用途」を示す副詞的用法の動名詞は、出自は動詞であっても、品詞上は名詞であり⁸⁾ (riding = 乗り物, disinfecting = 殺菌作用, flavoring = 味付け)、ゆえに全体的にその副詞句は語数的に少ないものになる傾向にあるという点である。他動詞の場合は目的語も従える⁹⁾が、せいぜいそこまでである (例 63-b: **for disinfecting towels**)。動作主も限定されない。例 63-b の場合で言えば、唯一含意される動作主は、主文動詞 “use” の意味上の主語で、“by people” の “people” である。ただし、これは文中で省略されている。一方、to 不定詞から成る文では、動詞の動作主は “for” + 名詞句で、省略されてはいるが含意されている。要は、それが一般主語の “we/people” なので省略されているわけなのだが、特定の人 (例えば聞き手の “you”) も含意されうる点が重要である。例えば 63-a. の “A camel can be used **for riding.**” は、単に「ラクダという動物は乗り物になりうる」という意味で、ラクダの機能 / 用途について述べた表現であるが、“A camel can be used to ride (on).” と言えば、ラクダを乗り物として旅行者に勧める人による表現となる。なぜなら、ここでの to 補部の動作主は省略されている “for you” で、to 不定詞は「未来志向性」の意味をもつからである。次の例文 65 と 66 も、一見すると、“for” + 動名詞でも to 不定詞でも意味的には大差ないと思われるものであるが、実際には異なるニュアンスをもちうる。つまり、“for” + 動名詞が単に主語の「用途」を述べるのに使われているのに対し、to 不定詞では聞き手を含む誰かによって今後起こりうる事が含意されているのである。

例 65-a. Computers are used **for making** our life more convenient.

コンピューターは社会をより便利にするために使われる。

65-b. Computers are used **to make** our life more convenient.

コンピューターが使われて、将来、社会はもっと便利になっていることだろう。

例 66-a. This pot was used **for cooking** potatoes.

8) 小西 (1980) は、動名詞は to 不定詞に比べて名詞性が高いと主張している。

9) 他動詞は目的語を下位範疇化しているからである。

この鍋はじゃがいもの調理用に使用された。

66-b. This old pot can be used **to cook** potatoes instead of that new one.

この鍋は、(今後) じゃがいもの調理である新しい鍋の代用になる。

次の例文からも分かる通り、「用途」を示す部分の動作が一度きりのものであっても、これから起こる動作が暗示される場合、「for」+動名詞ではなく to 不定詞が選ばれる。つまり、一回きりの動作なのか繰り返される動作なのかは to 不定詞の使用に関知しないということである。その動作が将来起こる可能性があるか否かが重要なのである。

例 67: The indemnity paid to the country was used **to establish** a university.

その国に支払われた賠償金は大学を設立するのに使われた。

上の例文で、賠償金が支払われたのはある過去の時点であるが、その時点から見ると、大学の設立はその後起こるべき到達目標であったため to 不定詞の使用が相応しいのである。

7. 最後に

本稿では、L2 英語学習者にとって使い分けの難しい動名詞と to 不定詞を、構文ごとに意味の観点から比較・考察した。分析の対象とした構文は、大きく分けると、be 動詞とそれに続く to 不定詞から成るもの、動名詞もしくは to 不定詞が文中で名詞・形容詞・副詞のどれかとして機能しているものの二種である。

結論として、動名詞と to 不定詞の使用上の違いを簡単にまとめると、いずれの構文においても、基本的に動名詞は過去志向性を、そして to 不定詞は未来志向性をもっている点が特徴として挙げられる。理由は、動名詞では動作の「機能」「用途」に焦点が当てられるのに対し、to 不定詞では“to” のもつ基本的な概念「方向性

と着点の存在」により「目的」や「意向・欲求」に焦点が当てられるからである。よって、to 不定詞は派生的に仮想上の（非現実的な）動作の表現にも使われることがある（例 9, 13, 21）。

また、動名詞では動作主が限定されないのに対し、to 不定詞では限定されるという違いも重要である。ただ後者の場合、動作主は省略されたり、文主語または目的語によって代替されたりと、一見紛らわしい様相を見せる。とは言え、動作主の存在が示されることにより、その動作は単に機能として見られるのではなく、未来に向けて到達（達成）が見込まれている進行中の活動として表現されることになるのである。例えば、「使われる」の意をもつ受動態表現 “be used” に to 不定詞が後続すると、文脈的に動作主が聞き手（you）である場合、文意としては推薦に近い意をもちうる（例：This sheet of paper can be used **to cover** your book.）。

とはいっても、Swan (2016) にあるように、実際には、L2 英語学習者が形容詞もしくは副詞として “for” + 動名詞と to 不定詞を使うとき、両者を正確に使い分けることは簡単ではないかもしれない。彼の文法書には「未来志向か非未来志向の二分法による規則化は例外が多すぎて役立たない」とある。ただ、これまでの議論を踏まえれば、両者には意味の核心部分で違いがあることも明白である。よって、この違いをしっかりと把握すれば、学習者は自信をもって両者を混同せずに使えるようになるはずである。「感覚的に両者を使い分ける」と「基本的な意味の違いを踏まえて両者を機能的に使い分ける」のとでは、言語習得上、大きな差が生じる。例えば日本語には、使用が稀な「訴求する」という文語動詞があるが、最初目（耳）にしたときに、意味不明で使いにくい語彙だと感じられるのではなかろうか。しかし、この語が形態素「訴」（訴える）と「求」（求める）から出来ているということに着眼すると、たちまちその意味（appeal to ～）が理解でき、使用も困難でなくなる。この例からも分かるとおり、言語の種類に拘わらず、形態素の意味分析に基づく学習方法は、言語を学ぶ上でかなり効果が期待できるのである。そしてこのことは、本稿で明らかにしたように、to 不定詞の理解においても当て嵌まるのである。

参考文献

- 安藤貞夫 (1984) 「動名詞と不定詞の意味論」『英語青年』10月号
- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*, Longman, London.
- Curme, George. O. (1931) *Syntax*, D.C. Heath, Boston.
- Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha, Tokyo.
- Dixon, Robert M. W. (1984) "The Semantic Basis of Syntactic Properties," *Proceedings of the Berkeley Linguistic Society* 10, 583-593.
- Duffley, Patrick J. (2000) "Gerund versus Infinitive as Complement of Transitive Verbs in English," *Journal of English Linguistics* 28 (3), 221-248.
- Kiparsky, Paul & Carol Kiparsky (1971) "Fact," *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*, ed. By Danny D. Steinberg and Leon A. Jacobvits, 345-369, Cambridge University Press, Cambridge.
- 小西友七 (編) (1980) 『英語基本動詞辞典』研究社
- Langacker, Ronald (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol 2, Stanford University Press, Stanford.
- Leech, Geoffrey N. (1971) *Meaning and the English Verb*, Longman, London.
- McIntosh, C (2016) *Cambridge Advanced Learner's Dictionary*, 4th edition, Cambridge Benziger Pub.
- 町田健 (1994) 『フロンティア英文法』研究社
- Oxford Advanced Learner's Dictionaries (2013) Oxford University Press.
- Quirk, Randolph. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Stevenson, A (1998) *The Oxford English Dictionary*, Oxford University Press.
- Swan, M (2016) *Practical English Usage*, Oxford University Press.
- 友繁義典 (2020) to 不定詞と動名詞 -like/love to 不定詞構文と like/love 動名詞構文を中心に - 『英語実証研究の最前線』 第1部第4章 開拓社
- 八木克正 (1987) 『新しい語法研究』山口書店
- Verspoor, Marjolijn (1996) "The Story of -ing: A Subjective Perspective," *The Construal of Space in Thought and Language*, ed. By Pütz Martin and René Dirven, 417-454, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Wierzbicka, Anna (1988) *The Semantics of Grammar*, John Benjamins, Amsterdam.